

1	大規模臨床試験のうち、DCCT は1型糖尿病を、UKPDS は2型糖尿病患者を、それぞれ対象としている。	○	問題文の通り。P114 a、および P115 c. 参照。
2	VADT 試験では、すでに 20 年をこえて糖尿病を有している患者でも厳格な強化療法の通常療法に比べて主要心血管イベントを減らし得るとされた。	×	VADT 試験解析の結果、強化療法の通常療法に対する主要心血管イベント発症におけるメリットは、罹病期間 15 年で逆転し、デメリットの方がむしろ多くなるとされている。P119 右上段。
3	認知症が軽度で手段的 ADL は低下しているが基本的 ADL は自立している高齢者で、SU 薬やインスリン製剤を使用中の場合の血糖コントロール目標は HbA1c8.0 未満とされる。	○	問題文の患者属性は「カテゴリ II」にあたり、重症低血糖が危惧される薬剤の使用がある場合のコントロール目標は HbA1c8.0 未満、とされる。P124 上 表 9-5。
4	黄斑浮腫は、増殖糖尿病網膜症に進展したのちに発症・重症化し、視力低下を来す一因となる。	×	黄斑症は、軽症の糖尿病網膜症の約 10%に合併、網膜症が進行すると頻度が高くなるが、増殖糖尿病網膜症に至る前に視力低下を来す原因となり得る。P63 左 E。
5	SGLT2 阻害薬は尿量を強制的に増やすことで腎に負担をかけるため、ある程度 eGFR が保たれていても、腎症 2 度以上の例には用いないほうがよい。	×	SGLT2 阻害薬(の一部)は大規模臨床試験のいくつかで腎保護作用があることが示されており耐用能がある患者では効果が期待される。ただし eGFR が 30 以上(腎症 3)までで使用する。P70 左下～右上。
6	サインバルタは抗うつ薬、リリカは抗けいれん薬に分類される。	○	問題文の通り。サインバルタは中枢(脳内)におけるセロトニン・ノルアドレナリン再吸収を抑制し、シナプス間隙でセロトニンほかの効果を高める抗うつ薬で、リリカは抗けいれん薬と同じく神経興奮を抑制する
7	メタボリックシンドロームから進展する動脈硬化は、内臓脂肪から分泌されるアディポネクチンの分泌過剰によって引き起こされる。	×	アディポネクチンは動脈硬化予防的に働くアディポサイトカインであり、進展させる方向に働くのは、TNf- α などとされる。
8	糖尿病足壊疽は、ABI 検査で発見されるような大きな動脈の狭窄・閉塞よりも、比較的小さな動脈の閉塞によるものが多い。	○	問題文の通り。小さな動脈の閉塞によることが多く、まだら壊疽を生じやすいとされる。P82、右中段 D、
9	椎体あるいは大腿骨近位部が、転倒や尻もちなどで骨折をきたした場合、骨密度の値によらずに骨粗鬆症と診断する。	○	原発性骨粗鬆症以外の疾患や続発性骨粗鬆症を認めない場合で、これらの部位に脆弱性骨折が発生した場合には、それだけで原発性骨粗鬆症と診断する。P89 表 6-12。